

地域の底力

新潟県佐渡市

佐渡の暮らしと文化を 次の世代に伝える

佐渡島には、
トキが住む豊かな自然と金山という、
世界が認める宝がある。
そして今、その宝を受け継ぎながら、
持続可能な未来へと進むために、
人を惹きつける挑戦が続く。

佐渡島では、この20年、農業や化学肥料を減らすだけでなく、田んぼの周辺の魚・鳥や植物を育てるための農法を取り入れてきた。そうしたトキとの共生のための取り組みもあって、絶滅の危機にあったトキは、今では600羽ほどが佐渡の野山に住む。田んぼで餌をついばみ、空を舞う姿が日常的に見られるようになった。

取材・文 山内史子
写真 野瀬博

子育て世代を島に誘う 企業誘致と起業支援

新潟県佐渡市は、二〇〇四年、佐渡島の一〇市町村が合併し、一島一市として誕生した。佐渡島は、古事記、日本書紀の国生み神話にも登場する由緒があり、古くから貴人や知識人の配流の地としても知られる。近世には日本最大の金山が幕府の財政を支え、技術者をはじめ多くの人が島に集まった。その遺構は二〇二四年に「佐渡島の金山」として世界文化遺産登録を果たした。



小木海岸は島の南西端の景勝地。この一帯は遊歩が多く、たらい舟を使った磯遊びが行われていた。

島の経済は豊かな自然を生かした農業、漁業や、観光業が主力だが、長きにわたる人口減少に悩む。そうした中、ここ数年は活発な企業誘致や島内での起業の増加が目玉を集める。市役所職員を経て二〇二〇年から市長を務める渡辺竜五氏は、その背景をこう話す。

「一九五〇年ごろに二万人を超えていた人口は、昭和末期から年間一〇〇〇人のペースで減少を続け、現在は四万七〇〇〇人になりました。何より出生数が二〇〇人を割ってしまったのは寂しい限りです。そんな現状を覆して持続可能な未来をつくるに



岩塚本は小木海岸の入り口には通ずる道。かつては北前船の交易でにぎわい、船大工の技術をこころした商家や廻船問屋の建物が今も数多く残り、美しい海をしのぐための石造木造並置構が印象的だ。

は、働き手であり子育て世代でもある二〇一四代を呼び込まずにはなりません。移住や定住を促すためには、働く場を増やす必要があるとの考えに至りました」

市では起業成功率ナンバーワンの島を掲げ、企業誘致や起業を積極的に推進している。二〇二一年、地元の企業経営者が集まるポワンティア団体NEXT佐渡とも連携して、佐渡ビジネスコンテストを立ち上げ、地域の課題解決や佐渡に根差すビジネス創出の流れを加速させ

た。さらに、古民家を活用したインキュベーションセンター「河原田本町」を開設し、起業したばかりのスタートアップに対してシェアオフィスを提供するなど、サポート体制を整えた。

これまでに企業誘致は約六〇社、起業は約四〇社を数え、雇用創出も約五五〇名に達している。島外からの移住は年間五〇〇名ペースが続き、その半数を三〇代までの若者が占めるという。

着実かつ大胆に 島の経済を変えていく

佐渡に吹くあらたな風の先陣をきったのが、二〇一二年にLaneCreative, A.T.I.V.E.を起業した榎本斗氏だ。地元出身だが、東京で就職した後、起業をきっかけに佐渡に戻ってきた。同社のセキュアなウェブ制作とセキュリティ保守管理サービスは、金融機関や大手企業が採用するなど高い評価を得ているという。本業の傍ら、榎氏は市の



島のくびれ部分の東側に位置する両津港は、佐渡の表玄関。新潟ととの間をカーフェリーとジェットフォイルが結ぶ。南西部の小木港からも両江津港に定期航路がある。

企業誘致や起業推進の取り組みを後押ししてきた。

「起業にあたって佐渡を選んだのは、何かしら生まれ故郷に貢献したいという思いでした。人がいなくなれば、まちは廃れます。二〇一五年に同じ志を持つ地元の若手経営者とNEXT佐渡を立ち上げ、地域社会にコミットメントする企業を島に呼び込む活動を始めました。さらに、市が共催する佐渡ビジネスコンテストをお手伝いしています。行政が手を付けにくいことを民間が補完するつもりです

が、佐渡市は反応が早く、共通のゴールを目指すパートナーとして心強く思っています」

起業は成果が出るまでどうしても時間がかかる。そのため、榎氏は自らの人脈を活用して、既に実績のある企業を島に呼び込むことにも尽力している。自治体からの助成や補助金もあるが、先進的な意識を持つ経営者ほど、ストーリーが決め手になるといふ。



上/LaneCreative社長の榎本斗氏。本社は江戸期の旅館を再生した跡地で趣のある建物。
下/かつてのにぎわいが形を変えて今につながる。建物裏の少し低い敷地をくぐった一室に、多数の若者が集まり、静かに勉強に励む。もともと全国でリモートワークで働く社員が多いが、「修業」のため、若い頃の数年を佐渡に積み、帰郷を積むという。

島内外の知識人が集まって佐渡の未来を語るサロンでもありました。今は建物が増え、二階部分が使えませんが、エアカウンも十分に効かず、働く場所としては必ずしも適していないかもしれ

ませんが、時を経て再び若者が集まり、新しい佐渡をつくらうとしている。そのようなストーリーが魅力となり、起業家の共感を呼ぶと思います」

次は、銀行が使っていた建物を活用した新しい事業を検討しているという。

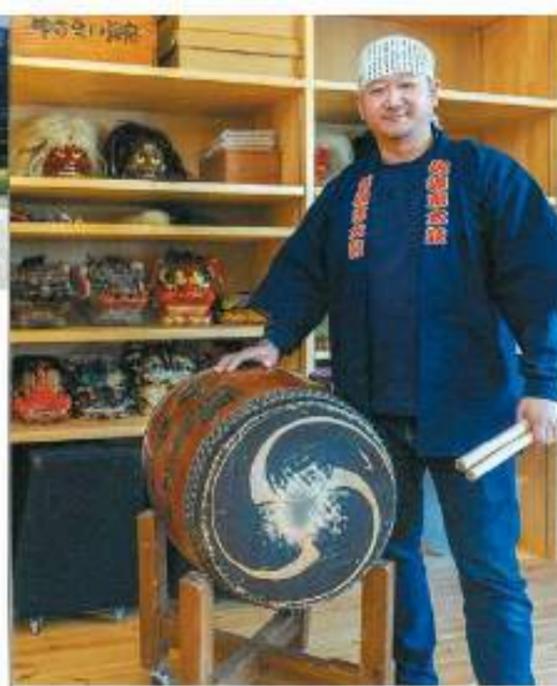
「銀行の建物は正直に言って使いにくいところもあるんですが、銀行はそれぞれの街の中心にあり、利活用は街の活性化の旗印になります。また銀行の歴

半々のイメージと当社の事業内容であるセキュリテイがつながります。これもストーリーを強く仕掛けと考えています。ここで一〇〇人が働く場にする計画ですが、さらに一〇〇人がITを学べる場にしたと考えると、将来的には特色あるスキルを習得できる教育機関になれるでしょう。そうなれば、学ぶために島に行く、子どものために佐渡に住むということになる。そんな夢を持っています」



コメ輸出の挑戦と 島の暮らしが育んだ 鬼太鼓の継承

島の将来を思う独自の取り組みは、ほかでも多数見られる。古くから島の営みを支えてきたというコメ作りでは、佐渡相田ライスファームの相田忠明氏の挑戦が目を引く。二〇一〇年に実家の農業を継いだ相田氏は、農協や国内の販売だけでなく、シンガポール、香港から始まり、フランス、中国と、コメの輸出にも取り組んできた。「コメの国内消費は減少が続いていたし、国の減反政策もあり



佐渡相田ライスファームの相田忠明氏。コメ作りの傍ら、佐渡の伝統芸能である鬼太鼓の魅力を伝えるため、イベントや観劇製作、鬼面など道具づくりの継承に取り組む。



佐渡神社の舞台は島で最大。かやぶき屋根の舞台は周囲の田圃風景にとけ込む。佐渡は古くから能が盛んでかつては200ほどの舞台があったという。今も市内の3割に当たる35の能舞台があり、春から夏にかけては観劇も行われる。

りました。こうした外部環境の影響を受けずに自立するためには、輸出が必要と考えたのがきっかけです。農閑期である冬はPRに奔走し、ほぼ佐渡にいないという生活が数年続きました。粘り強く続けていく中で、メディアで取り上げられたりするうちに、輸出もうまくいき始め、農業を始めて七年目によりやく笑って正月を迎えられるようになりました」

相田氏のコメは、徹底した品質管理のもとで栽培されており、ミシュランの星付きレストランなどで多くの人がそのうまさに魅了される。これまで国内の有機JAS認証と国際的な認証グローバルG.A.P.を取得。海洋深層水や有機栽培に用いる肥料も牛糞やオイスターシエル

のパウダーなど佐渡産を貫く。「さらにEUのオーガニック申請を行う予定です。申請費用は安くありませんし審査は厳しい。それでも、常に先んじていきたい。」

小さい農家であっても、産物には自信がありますと、そう胸を張れなくてはお客様に失礼です。ただそれだけの思いです」相田氏はコメ同様佐渡の伝統芸能である鬼太鼓(おにだまこ、おんてこ)にも心血を注ぎ、その保存、継承を目的とした「さどやニッポン」を設立している。

「鬼の面をつけて舞う鬼太鼓は島内一二六の集落で行われ、それぞれすべてスタイルが異なります。五穀豊穡や厄払いを願い、各地域の神社に奉納もされますが、神事というより見る側も演じる側も楽しめる芸事です。近世の佐渡は豊かだったよう、集落ごとに競うように神社があります。その神社の祭りの中で鬼太鼓が生まれて広まっ



トキの森公園。飼育されたトキを開放して豊栄で、展示資料館でトキの詳しい生態や野生復帰の取り組みを知ることができる。

鬼太鼓の多くは四月中旬の祭りで披露される。日程が重なることもあって、他の集落の鬼太鼓を見る機会は少なかったという。それが、SNSで横のつながりができてくるようになった。相田氏が音頭を取って同じ志を持つ仲間と企画した佐渡祭ワールドツアーが敢行されたほか、各集落の舞いを映像化した発信も進められている。

「われわれの地域はコメどころなので、鬼面の髪に島の風尾を使うことが多いです。漁業が盛んな地域は海藻を使い、林業がなりわいのエリアは鬼がおのを持つなど、各集落の営みが鬼太鼓にも影響を与えています。さらに、室町時代に配流された世阿弥や佐渡金山の繁栄の影響



金銀山の船橋から昭和初期には東洋一と謳われた北沢温泉旅館。廃止後は時の経過により、今では巨大なコンクリート施設を築き、史跡内に元のまもづくり民体の発案でカフェが設置されている。

旅行者との交流により 再起動する金山のまち

を受け、佐渡は昔から能が盛んでしたから、能の所作が入る鬼太鼓もある。金山や北前船の交易による人の流れと繁栄によって、島内に全国各地の神社が勧誘され、同時に多様な文化がもたらされました。そうした文化が鬼太鼓とつながっています。伝統芸能の継承は地域の営みと歴史の持続を意味しますから、なんとかして鬼太鼓を次世代に継いでいきたいと思っています」

観光面では「佐渡島の金山」の世界文化遺産登録以降、観光に旅行者が増えている。金山がある蔵山町として栄えた相川地区では、二〇二四年に開業した古民家ホテルNIPPONIA、佐渡相川金山町が、米誌の「世界で最も素晴らしい場所2025」に選ばれ注目を浴びた。まちづくり事業会社「相川車座」を経営する用宮隆三氏は、東京出身ながら縁あって官民連



上/蔵山町の佐渡は、佐渡金山の歴史をたどれるガイド施設。同時に相川地区の観光や飲食店といったまち歩き情報を案内する。

中/佐渡金山と佐渡奉行所を結ぶ津町通りは多くの商店が軒を並べたかつてのメインストリート。今も古い町並みが残る。下/宿泊施設の1階ロビーは、伝統芸能の披露やパズルなどのイベントの場にもなり、子どもたちが見学に来ることもある。

携による佐渡のまちづくり事業に間わり、地域を巻き込んでいく役割を担うことになったという。「江戸時代の相川には五万人が暮らしていました。かつての奉行所や古い町並みが今も残っています。昭和の時代も金山で働く人々にぎわっていましたが、

一九八九年の採掘中止後、まちの飲食店や宿泊施設は減少し、金山の見学者も相川を素通りするようになりました。ですから、できるだけ相川に滞在する時間を延ばしたい、できれば宿泊してもらいたいと取り組みを始めました。最初に掲げたのが、まちごとミュージアムというコン



「佐渡金山が世界文化遺産に登録されたことで、地元の意識や価値観が古いものを生かそうという方向に変わりつつあるように思えます」と、相川車座社長の用宮隆三氏は語る。

セプトです。相川の地域にどっぷりと漬かってもらい、地域との交流により相川ファンを増やす。関係人口の目標を五万人として取り組みをスタートしました。佐渡金山ガイド施設のきらりうむ佐渡にある金山の歴史展示も含め、観光施設の共通チケットを販売し、一帯の回遊を促す。古民家を活用した五種九室の宿も、まちごとホテルをうたい、チェックインの受付はきらりうむ佐渡が担当。ウェルカムドリンクは近所の酒販店やバーで楽しみ、夕食は周辺の飲食店を利用してもらう。宿泊客をホテルに閉じ込めず、できるだけ地域との関わりを増やすのが基本コンセプトである。



夕景を望めるカフェは、旧西三川小の跡目空だった空間。卒業生が訪ねて来られるように、母校として守ってほしいと、尾畑氏は話す。

「普通なら宿泊施設が担うことを、うちの宿はまちの人にお願ひすることで、地域の店舗や施設へと足を運んでいただきたいと考えました。従業員は地元の若い世代を中心に一五人ほどがアルバイトですが、核になっ

て働いてくれる人も育ち、いろいろな提案も出てきます」。今後は、冬の来島を促すためにノドグロなど食の魅力を強くアピールし、地域一帯のさらなる整備も求められると話す雨宮氏だが、宿の開業以来、変化を実感していると顔をほころばせた。

「新しい取り組みゆえに最初は、なかなか地域でも理解いただけなかった部分もありましたが、開業するにふん変わりしました。宿の周辺の店舗にお願ひして地域のお店にお客様をご案内すると、お店の人や、居合わせた地元住民も、親しく交流したり、中には一緒にほしご酒するなど温かいもてなしの輪が自然に生じています。われわれからお願ひしてということではなく、佐渡の人の良さですが、ご近所づきあいの延長なんです。それ

配流の地でした。その後も、島外の人からたらす情報や文化が大きな恵みを与えてくれたという記憶が、われわれのDNAに刻まれているのかもしれない。酒造りの副産物である酒かすのカフェでの有効利用、太陽光パネルの導入など、学校蔵では資源とエネルギーの循環も大切に、持続可能な酒造りを心掛けてきたという。かつて「日本で一番夕日がきれいな小学校」と評された、美しい眺めも引き継がれている。

トキが復活した島を 次の世代につなぐ

佐渡島は、学名ニッポニア・ニッポンとして知られるトキが今でも飛び交う土地でもある。二〇〇三年に日本産トキが絶滅したが、その後、中国産の繁殖などにより個体数を増やし、今では島内に約六〇〇羽が野生で暮らす。渡辺市長が、トキのいる佐渡の暮らしについて静かに語る。

「トキは島の象徴でありつつ

が宿の高評価につながっているのをうれしく思っています」

日本酒造りを学ぶ場で 海外に広がる 人のつながり

佐渡島に点在する五軒の日本酒蔵も観光客を引き寄せるが、創業一八九二年の尾畑酒造が手掛ける「学校蔵」は学ぶ場として多くの人が集うのが興味深い。廃校となった旧西三川小学校を再活用して、二〇一四年に二つ目の酒蔵として再生させたという。最初は免許の関係からリキュール類を製造していたが、二〇一九年には清酒特区第



「学校蔵はスタートアップの意識で取り組んでいます。五代続く老舗ではありませんが、それぞれの代で果たした役割を積み重ねてきました。次の世代にも期待しています」と語る、尾畑酒造五代目元祖の尾畑留美子氏。

一号として日本酒の製造を開始した。冬は本蔵で寒仕込みを行うため、学校蔵の仕込みは夏に行う。原材料はオール佐渡産で徹底しており、相田氏の取り組みも認証米も積極的に採用している。スタート直後から酒造りの体験プログラムを始めたと言っているのは、五代目蔵元である尾畑留美子氏だ。

「学校蔵での仕込みに参加するコースですが、海外の方の申し込みが多いんです。日本酒の国内消費量は減少傾向にあるものの海外への出荷量は増え、当社でも二〇カ国に輸出しています。日本で味わった酒に魅せられ、帰国後も楽しみ、さらに

は好きが高じて自分でも酒造りに関わりたいと思って再来日する。学校蔵は世界に日本酒が広まっている、循環の一部になっていると思います」

二〇二三年から北米酒造組合(SBANA)との連携プログラムが始まり、二〇二五年からは新潟大学日本酒学センターと連携した外国人向けの「日本酒学プログラム」も始まった。深夜に及ぶ作業にも携われるよう、宿泊スペースも設けられている。

学校蔵での学びは、酒造りだけでなくはない。二〇一四年以降、「佐渡から考える島国ニッポンの未来」をテーマとする特別授業が毎年行われ、こちらも国内外から講師や受講者が集まる。東京大学と芝浦工業大学のサテライト研究室も誕生した。尾畑氏は、学ぶ人と地域の人が出会える場が欲しいとの思いから、旧職員室を利用してカフェを設けた。「蔵やカフェでは移住者も働いていますが、佐渡の人ともうまくとけ込んでいるように思います。その昔、佐渡島は買人の

も、今では島の日常的な存在です。空を飛ぶ姿を見ると、平和だなあ、佐渡はいいなあと思いますね。そんなトキが住む自然豊かな環境で、民間企業のビジネスを後押ししながら地域の持続可能性を高めていくのがわれわれの目指すところです。小さなことですが、この新しい市庁舎でも積極的に脱炭素に取り組んでいます」

数々の挑戦は、市の職員にも前向きな影響をもたらした。

「民間企業に知恵を出してもいい、それを支援して具現化するのが行政の仕事だと、就任以来、職員に語ってきました。かつての自分にも重なるところがあります。職員は、地域のために霞が関の省庁に自ら交渉に赴くことにもためらいがなくなっているようです。民間企業の皆さんと話し合う機会も増えて、職員の意識が変わってきていると思います」

職員のアイデアから、新規の取り組みも生まれた。その一つが、「島の推し」ことグランプリ。「高校生が地元企業を取材

し、応援したい推しの仕事を選び、PR記事を作成するコンテストです。島に働く場が増えていくことを高校生に知ってもらい、良い機会になっています。また、かつて地元での就職を断念して島を出た学生や社会人に、地元にも働く場ができたこと知って戻ってきてほしい。就職サイトでも佐渡の求人検索できるようなサイトの運営会社と連携しています」

金山やトキ、熊、鬼太鼓など、佐渡が誇れるものを子どもたち

に知ってもらい、地元への思いを継いでいくことが本島の人口減少対策だと思っています」

「佐渡へ佐渡へと草木もなびくよ」と佐渡おけさで歌われた島が、かつてのように人を惹きつける未来はそう遠くないかもしれない。

佐渡の全体的記録は今昔物語の時代にさかのぼるが、本格的な開発が始まったのは江戸初期。「道の跡」はその時代に露出した全貌を掘り下げるうちに山頂部がV字に割れてできたという。周辺の史跡・施設は江戸期から明治期にかけての保護・整備技術の発展や人々の営みを語る。1969年に金山は林山した。

